

鴻 koh

月刊俳句誌

令和元年11月1日発行
(毎月1日発行)
第14巻第11号 通巻161号

11 月号
2019



ハーバーの百の帆柱百の秋

天の川大空といふ絵巻物

忌を一つ修し草の実草の絮

迢空忌なり葛の葉の裏の白

分別を捨てよ捨てよと葭切は

すこし離れて一茎の曼珠沙華

茄子の馬歲月は人待たぬとは

こんこんと泉村上鬼城の忌

町役場跡の鴨上戸かな

網ほほづき辻の薬師に日の溜る

鯰跳んで跳んで六人河岸の秋

思ひ立ちしことの一つに秋遍路

初一念通しくちなは穴に入る

百の秋

主宰作品

増成栗人

詩 作品抄

狐の剃刀したたかに雨がくる 荒井一代

施餓鬼会の寺の地獄凶風の音 中西富士子

梅干して主婦てふ小さき衿持かな 田部富仁子

海夕焼人を寡黙にしてしまふ 緒方七星

考へる人にやさしき処暑の雨 山岸明子

涼新た急須の蓋に穴一つ 森祐司

金色堂かなかなかなの真ん中に 藤原明美

なまくらな包丁を研ぎ十三夜 水沢和世

初秋の一灯カフェのカウンター 足立枝里

芋煮えよ仕事の顔と母の顔 村手雅子

颯爽たる日傘男子と原宿へ 佐藤慧美子

夏ゆくか砥石を水に沈めては 守屋久江

羽化できぬ蟬あり湖の明け切らず 良知悦郎

鳴かずして空を見てゐる秋の蟬 岩崎俊

毛馬の堰草笛となる草を摘む 林未生

鹿の眸にやさしさのあり地藏盆 山崎正子

膝小僧の囲む線香花火かな 中川幸恵

乱歩邸の苔の裏道早梅雨 井上つぐみ

古書店を出て緑蔭に歩み入る 山本留美子

七夕にボサノバを聴くカフェテラス 野村昌代

狐の剃刀したたかに雨がくる

荒井一代

狐の剃刀は早春に葉が伸び夏前には枯れてしまふ。そして、夏の終りには花茎を立ててオレンジ色の花を付ける。即ち茎先に花を付けただけの葉のなき花どき。草地に群れて咲くこの狐の剃刀は穏やかな静けさを持つ花にして、なぜ「狐の剃刀」という鋭き名が付いたのか。先の尖った葉の形態から想起しての名であると言われている。その狐の剃刀の花を叩く激しい雨。ふと作者はその雨に剃刀という言葉の鋭さを重ね合わせていたのではと考えている。この景を想起したとき、作者は花の名の持つ逞しさのままに、激しき雨に耐える花のいのちを垣間見ていたのである。荒井一代さんらしい景の描写を軸にした、対象のいのちとの問答が窺える作品である。

施餓鬼会の寺の地獄図風の音

中西富士子

施餓鬼会は祖霊を死後の苦しみの世界から救済するための仏事。種々の供物を祖先の霊に供えて冥福を祈る行事だが、最近では盂蘭盆会と混同して使われている。その日、作者は祖の供養に菩提寺を訪ね、その寺に掲げられている地獄図に激しく心が騒いでいるのだ。盂

蘭盆会と言わず施餓鬼会と詠うには、作者の死後の世に向ける微かな憐憫の情があり、それが下五の「風の音」に打ち出されている。さまざまな苦行を強いられる地獄図の凄まじさも施餓鬼会の寺であれば、やわらかな寧ろぎに転化することもある。中西富士子さんは、どこかほっこりとした親しみを覚える作家。それだけにこの地獄図に、作者のこれは幻の世界なんだ、という達観した眩きの明るさが偲ばれてくる。

梅干して主婦てふ小さき衿持かな

田部富仁子

一家の暮らしを守る主婦。平素はそれを振り被ることとはないが、暮らしの仕事のうちにはふと「主婦」という立場に誇りを覚えるときがあるのである。今日、作者は我家で育てた梅の実を干す。廻りを包む明るきまでの日溜り。あくまでやわらかな会津盆地の一刻。その中であればこそ、一家を守る主婦としての衿持が、ぬくもりのように静かに読み手に伝わってくる。田部富仁子さんは控え目な静けさを持つ作家。「会津句会」のベテラン作家であるが、穏やかな人柄を覚える人である。薙の上に干す実梅の仄かな香りが、そんな作者の息遣いを伝えるように届く作品。取り囲む飯豊連峰の日差しが静かに、そして底抜けに明るい。

海夕焼人を寡黙にしてしまふ

緒方七星

体調を崩している緒方七星さんと会えぬ歳月が三年ほど流れた。しかし、その間、己が身を庇いながらも一度の欠詠もなく、作品に衰えも見せぬ。その氣力に大きな感慨を覚えている。掲句もその一つ。札幌に近い海辺に佇む作者の軽い気鬱が、逆に明るきロマンへと読み手を導いてゆく。沖までを茜色に染める蝦夷の夕焼。その茜色が鮮やかであればあるほど、その海の夕焼に没しきような緒方七星という作家の哀調を帯びたロマンが見えてくる。寡黙とは孤独感とともに、何かに執着する作家の美意識がある。元来、己がロマンを追い続ける七星さんの詩情が、この「寡黙」の一語の中に見事に凝縮されている。

考へる人にやさしき処暑の雨

山岸明子

この考える人はロダン作のブロンズ像。右肘をついて沈思する青年の坐像。現在、大小四種類の像があり、パリのロダン美術館をはじめ世界各地に数体あると言われている。我国では東京上野の国立西洋美術館の中庭にある。そこで催されている美術展を訪れたときの作品であろう。その日、静かな処暑の雨がこの坐像に降り注いでいるのだ。処暑とは暑さがおさまる季節。

陽暦では八月下旬になろうか。今までの極暑を抜けて少し息を抜くような夏も終りの雨。考える人の像の前で一緒にその雨に打たれる作者。そんなどこか夢の世界に遊ぶような、自分自身に向ける物語がしつとりと読み手に語り掛けてくる。ムード派作家の山岸明子さんが、暮らしの一刻を景として描いた静かで美しき物語である。

涼新た急須の蓋に穴一つ

森 祐司

考えてみると、器内に籠る熱気を抜くためか、急須の蓋には必ず一つ小さな穴がある。そんなごく当り前のことを、いま気付いたように詠う作者。それが当り前のことであるだけに、逆に潔きシャッターチャンスの捉え方に共感を覚えている。ああそうなんだ、と思つたときに覚えた新涼の爽やかさ、十七音を充分に使いきつたような快さの際立つ作品である。森祐司氏は結構自在に対象と対う作家。ゆえに時折は自己陶醉に陥るときがあり、難解な句となることもある。しかしこの作家の旺盛な意欲は買いたい。俳句は伝達の文芸。己が受けた感動を伝達するには読み手の容易な理解が必要と考えている。掲句のように明確に景を捉える描写の姿勢も、森祐司の一人の作家として成長して行く道のこれからの課題であろうと考えている。

妻籠吟行

はなのき句会

神野未友紀

六月八日〜九日の二日間、「はなのき句会」と「夕陽ヶ句会」による吟行鍛練会が行なわれた。増成栗人主宰をはじめ東京から足立枝里さん森祐司さんが参加。合計十五人による鍛練会となった。名古屋駅で合流し、中央本線で南木曾へ。マイクロバスで中山道四十二番目の宿場妻籠に入った。日本で初めて重要伝統的建造物保存地区に選ばれたこの地は、江戸時代の景観がそのまま残っており、江戸にタイムスリップした様。軒先を跳び交う夏燕の下、雨模様を気にしながら歩き始めた。

「木曾路はすべて山の中である。」で始まる『夜明け前』島崎藤村の母の生家が妻籠本陣。脇本陣は藤村の初恋の人の「おゆふ」の嫁ぎ先の奥谷である。一行は奥谷に入った。木曾の松をふんだんに使った風格のある建物に夏炉が焚かれ、磨き上げられた柱や木戸が光っていた。囲炉裏に横座・嬬座と座る場所があることを知り、家を守ってきた人達に思いを馳せることができた。ざざ降りの雨も少しやみ、それぞれ上手、下手、川沿いの道へと分かれて歩いた。

宿泊先の「ホテル木曾路」に到着後、一日目の句会が始まった。

妻籠宿一日目

増成栗人主宰特選

花あやめ檜の笠を薦めらる
寒山拾得ふふ鳥の声近づけり
ふたたびの妻籠よふたたびの夏よ

祐司
歩
未生

苗木城跡二日目

増成栗人主宰特選

風渡る山城跡の落し
城跡に吹かれし定家葛かな
河骨の花を静かに濡らす雨
半谷洋子特選

文隆
遥
隆

風渡る山城跡の落し文

石垣は朽ちず泰山木の花

山国の山を離れぬ夏の雲

横井遥特選

巢立ちたる燕に木曾の山幾重
明易し谷にはりつく柚の村
木曾谷の大河は蛇行して涼し

未友紀
未友紀
未生

森多 歩特選

水無月の菊の御紋の釘隠し
城跡の吹かれし定家葛かな
二の丸へ定家萬の花葛めり

遥
遥
洋子

句会終了後、中津川駅から中央線で名古屋へ。名古屋で解散となった。

驟雨・青雨・梅雨寒・梅雨晴れ・降りみ降らずみ・本降り
と雨が降ったり止んだりではあったが、おかげで全天候を味わうことが出来、また信州の山にかかる霧も楽しめ、有意義な句会であった。苗木城の守り神は、八大龍王。雨をつかさどるというこの神様に守られて山城跡を歩かせてもらったかなとふと思つた。



半谷洋子特選
雨音に囲まれてゐる青胡桃
旅籠屋の袴行灯緑雨くる
寒山拾得ふふ鳥の声近づけり
横井遥特選
ふたたびの妻籠よふたたびの夏よ
驟雨ゆきて白き真昼の残りけり
十葉の花いきいきと狐雨
森多 歩特選
藤村の詩を諳んずる夏の庭
だんご屋に江戸の風来る夏燕
半殺しに串刺の餅五月闇

未友紀
栗人
歩
未生
未生
洋子
未友紀
陶火

句会終了後夕食。その後主宰の部屋で地酒を酌み交わし、南木曾の夜が更けていった。

二日目は、巨岩の上に築かれた山城、苗木城へ。中津川市内を東西に流れる木曾川の右岸に一段と高くそびえる山にある城跡から、恵那山や木曾川をはじめ中津川市街を三六〇度見渡すことができ、雄大な景色と、日本のマチュピチュといわれる見事な石垣を堪能した。山城を歩いている間に雨が止んでいたのは幸運。駈門を淡竹を抱えて登っている一行と出会う。「淡竹なら採ってあげるよ。」と陶火さんが足早に山に入り、淡竹を折ってくださった。香り高い信州の淡竹はこの日のうちに茹でられ、我が家の夕食を豊かにしてくれた。

駅前の中津川観光センターにぎわい特産館で二日目の句会。句会が始まると雨脚が強くなった。



「渋谷・フレッシュな文化磁場」 鈴木 崇

通っていた大学のキャンパスが渋谷にあったため、九〇年代後半ごろからゼロ年代の初めにかけてよく渋谷の街を歩いてきた。映画、音楽、ファッション、刺激的なカルチャーが日々更新されていく街を歩くだけで、最先端の情報に触れている気分になった。

当時の渋谷は大型CDショップが立ち並び、最新の音楽が発信される「音楽の街」だった。講義終わりによく新譜を視聴しに行ったことを思い出す。

大型CDショップの一つが二〇一〇年に閉店する際には、インストアライブへ仕事終わりに向かった。サニーデイ・サービスという、大学時代によく聴いたバンドが最後に演奏をした。九〇年代後半のバンドの特徴にCDやレコードをマニュアルに漁って感受したセンスを音づくウに生かすという側面があるが、サニーデイ・サービスはそんなリズナー型バンドの代表だった。

田山花袋に『東京の三十年』という回想録

がある。自伝であるとともに明治文壇史でもある本書に、花袋がはじめて国木田独歩の住まいを訪れたときのエピソードが書かれている。当時、独歩は渋谷に住んでいた。

「渋谷の通を野に出ると、駒場に通ずる大きな路が檜林ひのりについて曲っていて、向うに野川のうねうねと田圃の中を流れているのが見え、その此方の下流には、水車がかかって頻りに動いているのが見えた。地平線は鮮やかに晴れて、武蔵野に特有な林を持った低い丘がそれからそれへと続いて眺められた。私たちは水車の傍の土橋を渡って、茶畑や大根畑に添って歩いた。」

ここでの「野川」は渋谷川の支流・宇田川だろう。「水車」はちよつと現在の宇田川町交番あたりにあったらしい。

描写された辺りは現在、隠れ家的な店舗が点在し、駅周辺の賑やかさとは異なる雰囲気醸し出しているエリアである。国木田独歩

住居跡の札がNHKセンターの向かいの通りにぼつんと立っている。

独歩の知的な表情やスマートな話しぶりから「ああいうフレッシュな文章が書けるのも尤もだ。」という印象を花袋は受けた。独歩は隣の牛乳屋を呼んで搾りたての牛乳を取り寄せ、コーヒールに入れて花袋にふるまっていた。現代でいえば、クリエイターらがスタバでラテをテイクアウトして打ち合わせをしている図だろうか。

独歩の代表作『武蔵野』は、渋谷から玉川上水あたりまで足を延ばす武蔵野風景のスケッチである。江戸以前の歌枕的な描写を脱し、近代的な口語文で雑木林や野原の詩趣を描くことで、日本近代文学の新たな可能性を拓いた。「風景の発見」を鮮やかに描き出す近代精神は、目に触れた事物をありのままに詠む正岡子規の俳句革新運動と軌を一にするものだろう。ちなみに『武蔵野』と子規の『歌よみに与ふる書』は同年明治三十一年の発表である。渋谷の駅周辺はこの数年で大きく表情を変えていく。これからも続々と新しい建物が出ていく。かつて渋谷の強い磁場からフレッシュな音楽が溢れたように、あるいは『武蔵野』のフレッシュな文章が生まれたように、新たな文化が花開くことを期待したい。



羽音集

増成栗人 選



金色堂かなかなかなの真ん中に 船橋 藤原明美
撫子や里山の風たをやかに
みちのくの風弾きつつ踊りの輪
晚鐘の音が揺らしぬる萩すすき
大仏殿風鈴の鳴る駅を出て
佇めば四方一面の青田風会津 中川幸恵
膝小僧の囲む線香花火かな
みんなを追うてどこまで行つたやら
紫陽花に語りし母よ瞑られよ
骨壺を抱へて戻る蟬しぐれ
手花火のいのちの色の哀しさよ 松戸 山岸明子
手遊びにホースで飛ばす水に虹
河野裕子の忌よ白桃の開けさよ
考へる人にやさしき処暑の雨
畦道をゆく少年よ晩夏光
車も人もふはふはゆれて残暑かな 流山 中内敏夫
猫じやらし外気温度が二度下がる
列車待つをとめの髪に草の絮
深川の芭蕉の道が神輿道
夕風が豊秋の田を波立たす

柔庵閑話

虫丸



先日のボクシングの試合はパンチ力もスタミナも勝ってるベンケーが

まるでパンチを当てられず一方的に負けちゃいましたがあれが技術の差なんですね

そつだよ 俳句も同じで作者がどれほど深い内容をもっている

あれ

それを読む人に感動として伝える表現技術がなければ伝えられない

表現を極めれば句の姿は自ずと美しくなる

僕のいう美意識とはそういうことだから

句の姿の美しさですか

ベンケーに次からリンク衣装を

牛若丸風にするように契めてみましょう